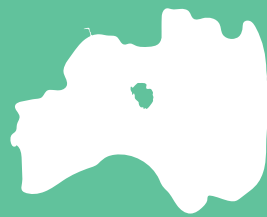

第 3 章

みんなで創り上げるふくしまの将来の姿

The Fukushima Prefecture Comprehensive Plan 2022▶2030



1 県民の皆さんからの意見

本計画の策定に当たっては、多くの県民の方々に参加していただき、問題意識の共有を図りました。福島県総合計画審議会での議論、市町村との意見交換、県内各地で開催したワークショップや地域懇談会等を通じ、県民の皆さんから「ふくしまの将来の姿」についてたくさんの意見を頂きました。

総合計画審議会からの意見

【概要】

総合計画審議会は、県の総合的な計画に関する事項を調査審議するための知事の附属機関です。環境、福祉、産業、地域振興など各分野の学識経験者及び公募委員 29 名により構成されています。

【理念、考え方に関する意見】

- ・ 地方分散型の県づくり
- ・ 小規模自治体への対応
- ・ 全国の人から憧れられる福島県
- ・ 現場の住民や自治体の立場に立った具体策
- ・ 右肩上がりではなく現実を直視して下がるものは下がると言うべき
- ・ 地域の視点が大事。県土の各地に人がとどまれるような地域
- ・ 時には県のリーダーシップが必要であること
- ・ 未曾有の災害後、県民が地域で頑張っていることを大きな木にする
- ・ 一人一人の思いを大切にし、強みをみんなが認める地域社会
- ・ 「人を育む」「心の豊かさ」が欠かせない観点
- ・ 一人ぼっちにしない（包摂性のある）社会
- ・ 多様性、一人一人自分らしく輝ける
- ・ 自分の意見を言える（自己表現できる）社会
- ・ 普通の会社に就職して良かったと思える社会
- ・ AI、IoT の先に来る社会を想定しておく
- ・ 挑戦をサポートする人の場づくり、環境づくりが重要
- ・ 人とのつながりによる安心や支え合い、学び合いが大切

【具体の取組に関する意見】

- ・ 風評の払拭に向けた正確な情報発信の継続
- ・ 再生可能エネルギーの更なる研究・技術開発の促進
- ・ 結婚から子育てまで切れ目のない支援
- ・ 多様な出産・子育てへの支援
- ・ 医療・福祉では人材不足と偏在が課題
- ・ 産業振興と人材育成の連携した支援
- ・ 新技術に対応できる人材を育成することが大切
- ・ 働く意欲のある障がい者などのマンパワーの活用
- ・ 子どもの学習権保障、多様化する子どもへの対応

市町村からの意見

【概要】

総合計画の策定に当たり、県内市町村と意見交換を行いました。

- ・ 浜・中・会津の特長を活かした均衡ある発展
- ・ 地域、企業の魅力を知る特色ある教育
- ・ 子どもの地域への愛着醸成
- ・ 人材不足対策（若者定着、働く場所確保等）
- ・ 交流及び関係人口拡大、移住施策の推進
- ・ 県独自の誇りあるスローガンを
- ・ 広域的連携は重要な視点
- ・ 防災・減災対策の重要性
- ・ 高齢者対策（交通移動、介護対策）
- ・ 夢、希望、明るい未来のある県づくり
- ・ 農業振興（耕作放棄地、担い手確保等）
- ・ 人口減少を踏まえた施策の必要性
- ・ オール福島でのイノベ構想の進展
- ・ これからは女性と若者の視点が大事
- ・ 指導者を育てるための人材の育成
- ・ 在宅ワーク、プログラミング教育など、情報化・デジタル化
- ・ Society5.0につながる考えで人口減少を克服していく必要
- ・ 水害・凍霜害対策
- ・ 有害鳥獣対策は不可欠
- ・ 復興の進捗を踏まえた計画づくりと柔軟な見直し

対話型ワークショップの意見

【概要】

県内各地で本県の未来を担う小学生、中学生、高校生、大学生を対象に県民参加型ワークショップを開催しました。

実施期間：令和元（2019）年10月～令和2（2020）年1月

参加者数：合計176名（小学生11名、中学生15名、高校生96名、大学生54名）

テーマ：「将来も住み続けたい（住みたい）と思う福島県の未来の姿」

<小学生>

- ・外国人にも魅力的な県
- ・子どもがたくさんいる福島にする
- ・文化やスポーツを発展させ、いい福島にしたい
- ・風評被害に負けない県
- ・みんなが健康に住めるような町
- ・子どもや高齢者に優しい県になってほしい
- ・交通の便がもっとよくなってほしい
- ・いろいろな人が来てくれる、魅力的な町

<中学生>

- ・安全な暮らしができる福島県
- ・子育てがしやすい環境がある福島県
- ・他県に福島県のことを知ってもらい、もっと活気のある県
- ・交流が広がり理解が深まる
- ・教育環境が向上し子育てがしやすくなる
- ・元気な高齢者が活躍している
- ・世代を超えて交流できる福島にしたい

テーマ：「自分が思う福島の“たからもの”」

<高校生>

- ・豊かな自然（磐梯山、猪苗代湖、尾瀬）
- ・観光地（鶴ヶ城、アクアマリン、温泉地）
- ・特産品（果物（桃）、米、牛乳）
- ・伝統（漆器、赤ベコ、じゃんがら念仏踊り）
- ・県民風土（やさしい人柄、親切、偉人）
- ・文化・スポーツ（合唱、プロサッカー）

<大学生>

- ・人や方言の温かさ、元気な高齢者
- ・浜・中・会津の多様な人々・文化
- ・特産品（果物、日本酒、米、郷土料理）
- ・技術力のある県内企業、工業生産・技術力
- ・豊かな自然（四季ごとの景色）
- ・歴史、文化、芸術（合唱、吹奏楽、演劇等）

テーマ：「みんなの力で解決したいこと」

<高校生>

- ・震災復興、風評被害、少子高齢化、地球温暖化
- ・質の高い教育による学力向上、学習環境の充実
- ・福祉医療を含めた都市機能の充実
- ・増える災害への対策
- ・働く場所、職種の充実
- ・自然や農地の管理、活用

<大学生>

- ・情報発信不足、震災復興、風評払拭
- ・交通アクセスの改善、充実
- ・健康づくり（減塩取組等）
- ・第一次産業の活性化
- ・過疎地域の対策
- ・若者の人口流出抑制、地域の担い手不足解消

テーマ：「福島の未来をつくるために私たちができること・すべきこと」

<高校生>

- ・県について自分たちが理解を深め、福島の良さや正しい情報を SNS 等で発信する
- ・地域 PR の CM を高校生で作る
- ・新しい伝統をつくる
- ・地域イベントへの参加やボランティア活動
- ・県内就職、進学して地元を支える
- ・自然を大事に自然をアピール

<大学生>

- ・自分たちが地域への理解を深め魅力を情報発信
- ・子どもに向けた地域愛着形成の活動
- ・高齢者のケア、若者の集落での活動
- ・大学生目線による地元愛着を育むイベント開催
- ・県内大学生同士が魅力を発信するコミュニティを立ち上げる
- ・地域の担い手不足を補うボランティア活動

地域懇談会の意見

【概要】

県内7つの地域において、総合計画の策定に当たり、多様な立場の県民の方々と意見交換を行いました。実施期間：令和2（2020）年2月 参加者数：合計44名

<主な意見>

- ・技術を持った中小企業もあるのにもったいない
- ・多様性が尊重された世の中となる施策が必要
- ・住む前の支援も重要だが、住んでからの環境整備も重要
- ・放射能の話から、次のステップに進んでいい時期だ
- ・「あるものを活かす」ということが大切
- ・外国人観光客（インバウンド）向けの環境整備が必要
- ・福島県内を東西につなぐ道路の一層の整備が必要
- ・医療の充実、特に病気となった場合の対策の充実
- ・子を育てる親世代が「ここに住んでいたい」と思える仕組みづくりが必要
- ・農業を担う若者を、様々な形で育成、探すことが課題である
- ・健康寿命は重要で、高齢者がボランティア活動など生きがいを持てる地域づくりが必要
- ・企業を継続させるためには、次の人へ引き継ぐ担い手育成という観点も若いうちから重要
- ・子どもたちに地域の魅力を伝えることが重要
- ・災害が起きる前から予測も踏まえて備えることが大切

県政世論調査・アンケート

調査名：県政世論調査（どのような県になってほしいか）

調査対象：満15歳以上の男女個人

配布数：1,300人 回収数：618人（回答率47.5%）

調査期間：令和元（2019）年7月24日～8月13日

<主な意見>

- ・福祉や医療サービスが充実し、お年寄りや障がいのある人が大切にされる
- ・豊かな自然環境が守られている
- ・教育環境が整い、子どもたちをのびのび育てることができる
- ・災害や犯罪が少なく、安心して暮らせる
- ・快適な生活環境の中で暮らせる
- ・産業が盛んで、働く場に恵まれている

調査名：少子化・子育てに関する県民意識調査

（少子化対策や子育て支援として、どのようなことが必要か）

調査対象：福島県内市町村に住み票がある

①子どもがいない方（18歳未満の子どもがいない20～60歳未満の方）

②子どもがいる方（未就学児童、小学生、中学生以上の保護者の方）

配布数：9,000人 回収数：2,486人（回答率27.6%）

調査期間：令和元（2019）年5月16日～6月5日

<主な意見>

- ・県内で就職進学する魅力が必要
- ・地域が一体となった世代を超えたふれ合い
- ・地元を知り故郷への誇りと愛着をもつ
- ・自然、伝統等体験による生きる力を育む
- ・いじめや社会的弱者への偏見、児童虐待をなくす
- ・保育士確保、保育士の質向上、保育施設整備
- ・広域的な病児保育体制づくり
- ・子育て相談しやすい窓口設置等の環境づくり
- ・育休取得推進や復職しやすい環境づくり
- ・障がい児への対応や安心して学べる環境づくり
- ・空き教室等を活用した放課後児童クラブの充実

調査名：高校生進路希望調査（福島県のこれからについて）

調査対象：県内の公立高校に通う高校2年生及び3年生

配布数：26,501人 回収数：12,507人（回答率47.2%）

調査期間：令和元（2019）年7月～9月

<主な意見>

- ・歴史の誇りが心を癒やし心の復興につながる
- ・避難解除により安心して暮らせる県
- ・都市部を広げず自然を大切に豊かに暮らせる県
- ・公共交通機関の発達が必要
- ・若い人向けの大型商業施設や遊ぶ場所が必要
- ・県産品の安全性を国内外PRで風評払拭
- ・若い世代が県産品を流通し魅力発信

コラム① ワークショップ参加者のその後をインタビュー！その1

令和元年度の対話型ワークショップ参加者（当時高校1年生）のうち、現在も高校在学中の2名に当時を振り返りながらお話を伺いました。

日 時：令和3年11月

参加者：県立白河実業高校3年 橋本さん、真岡さん

聞き手：復興・総合計画課 山田主幹

Q ワークショップに参加したきっかけを教えてください。

(2人) 当時2人とも生徒会に所属していて、生徒会の先生に声をかけてもらったのがきっかけです。各校1名ずつのところ、心細かったら2人でもいいよと言われ、2人で参加しました。

Q ワークショップではどんな事を話しましたか。

(真岡さん) 福島県の宝物や福島県が抱える課題、課題を解決するために自分に何ができるか、などを話しました。私は自分にできることとして、地域の方とコラボしてCMや動画を作成してはどうかという意見を発表しました。

(橋本さん) 他校の発表を聞いて、SDGsという言葉を知りました。

今では私たちもSDGsの推進に取り組んでおり、学校でも食べ残しを出さないように購買部のパンの残り個数をアナウンスしたり、休み時間に電気を消したりしています。

Q 新しい総合計画もSDGsもゴールは2030年です。どんな福島県になってほしいですか。

(橋本さん) 今よりも公園や遊べる所が増えて、子どもが住みやすい環境になって欲しいと思います。

(真岡さん) 人工的な県にはなって欲しくありません。福島県は人が温かいので、ロボットやAIだけが進みすぎない、人と人とのつながりが残っている県になるといいなと思います。



ご協力ありがとうございました！
(左から：橋本さん、真岡さん)

コラム② ワークショップ参加者のその後をインタビュー！その2

令和元年度の対話型ワークショップ参加者のうち、県職員になった3名に当時を振り返りながらお話を伺いました。

日 時：令和3年11月

参加者：市町村行政課 熊田さん（入庁2年目）、空港施設室 白石さん（入庁2年目）、

生活交通課 渡邊さん（入庁1年目）

聞き手：復興・総合計画課 山田主幹

Q ワークショップに参加したきっかけを教えてください。

(渡邊さん) 大学生の時、3人とも同じゼミで、ゼミの先生から勧められたのがきっかけです。私は当時3年生だったので、就職活動の参考になるかもしれないと思い参加しました。

Q 新しい総合計画の第一印象を教えてください。

(白石さん) 新型コロナウイルス感染症やデジタル変革など、最近の社会情勢もしっかりと反映されていると感じました。

(熊田さん) 総合計画というと堅いイメージでしたが、読み進めると県民の皆さんの声が必要な所に出てきていることが分かりました。

Q 総合計画をできるだけ多くの人に知ってもらうためにはどうすればいいと思いますか。

(熊田さん) まずは職員が知るきっかけとして、自分の担当業務と総合計画のつながりを踏まえながら

職員同士で意見交換する研修などがあると良いと思います。

(白石さん) 県でイベントを開催する時、そのイベントが計画のどの分野に関連しているのかを参加者に伝えていくと、関心を持ってくれる人が増えていくのではないのでしょうか。

(渡邊さん) 「総合計画を読もう」と呼びかけるよりも、SDGsを入口にすると県民の皆さんも親しみやすいのではないかと思います。



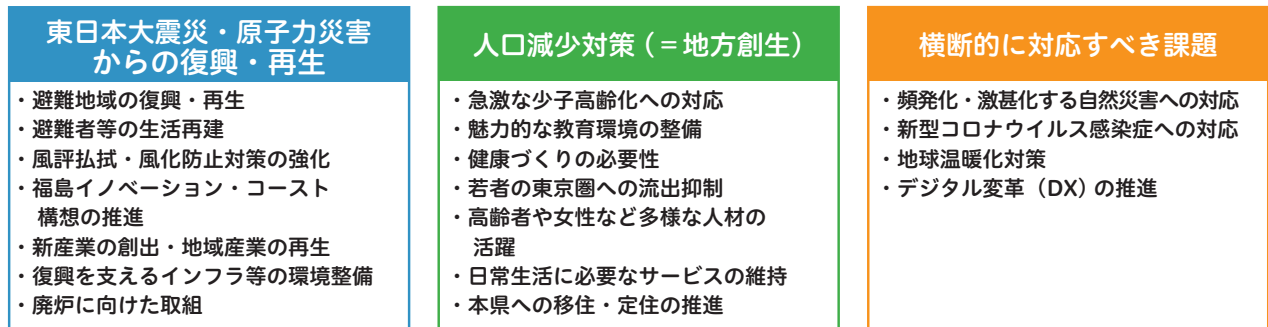
ご協力ありがとうございました！
(左から：渡邊さん、白石さん、熊田さん)

2 県づくりの理念

第2章「福島県を取り巻く現状と課題」と、県民の皆さんから頂いた意見を踏まえ、県民の皆さん、民間団体、市町村、県が連携しながら、「福島ならではの」将来の姿を実現するために共有する総合計画の根底にある根本的な考え方である「県づくりの理念」を整理します。

◆福島県を取り巻く現状と課題（第2章）

第2章「福島県を取り巻く現状と課題」においては、具体的に解決を進めるべき本県が直面する現状・課題を大きく3つに分けて整理しました。



人口減少が避けられない中で、**持続可能な地域社会を創り上げていくためには**、東日本大震災・原子力災害からの復興・再生や人口減少対策など**これまでの取組を継続しながら、新たな取組にも挑戦を進め、急激な社会情勢の変化に柔軟に対応していくことが大切です。**

◆県づくりの理念

多様性に寛容で差別のない共に助け合う
地域社会（県）づくり
(寛容、認め合い、つながり
→やさしさ)

**変化や危機に
しなやかで強靱な**
地域社会（県）づくり
(回復力、強靱さ、健全さ
→すこやかさ)

**魅力を見だし
育み伸ばす**
地域社会（県）づくり
(美しさ、あたたかさ、魅力・強み
→おいしさ)

本県は原子力災害による様々な分断、風評、差別・偏見と10年にわたって、戦ってきました。また、新型コロナウイルスにより自由や人とのつながりが制限され、不安感や孤独感が增大するなどの困難に直面しています。
一方で、復興の軌跡の中で、本県に心を寄せてくださる皆さんとのご縁と協働により、数多くの絆が生まれました。
これらの経験から、本県は一人一人が互いに認め合い、つながりを広げ、共生できる地域社会（県）づくりを目指します。

本県は、東日本大震災と原子力災害、さらに大規模災害、新型コロナウイルスなど、三重、四重の困難な課題に直面し続けています。そして、それらの困難な課題へ挑戦を続けてきた経験・知見からは、災害への対応力のみならず、コミュニティの再生など、地域の人々が手を取り合って果敢に挑戦を続けている本県ならではの回復力（レジリエンス）が培われています。
この本県で培われた強みを最大限いかしながら、様々な変化に対応できる強靱さ、健全さを備えた、人と人が支え合う地域社会（県）づくりを目指します。

未曾有の複合災害の中であって、福島が誇れる、おいしい食、美しい自然、県民の温かい心など、普段の生活では気づきにくい魅力や強みを改めて認識しました。
また、震災後、福島イノベーション・コースト構想などにより構築されたロボットや再生可能エネルギーなどの研究拠点は、ふくしまの未来を創る産業振興、人材育成を推進する大きな資産です。
これらの財産を改めて見つめ直し、地域の魅力や価値に県民一人一人が関心を持ち次の世代へと育てつなげることができる地域社会（県）づくりを目指します。

3 基本目標

県づくりの理念の下、県のみならず、あらゆる主体が「福島ならではの」将来の姿の実現に向け、連携しながら県づくり・地域社会づくりに取り組めるよう、基本目標を以下のとおり設定します。

基本目標については、9年後を見据え、自然災害や新型コロナウイルス感染症などの困難を乗り越え、東日本大震災・原子力災害や人口減少などの取組を着実に進めた先の、“世代を超えてつなぐ、ありたいふくしま”をイメージして設定します。

【令和12（2030）年度を見据えた基本目標】

やさしさ、すこやかさ、おいしさあふれる
ふくしまを共に創り、つなぐ

※「やさしさ」「すこやかさ」「おいしさ」を基本目標に設定した理由

県づくりの理念である「多様性に寛容で差別のない共に助け合う」から「やさしさ」、「変化や危機にしなやかで強靱な」から「すこやかさ」、「魅力を見だし育み伸ばす」から「おいしさ」（これは食だけでなく「美しい」という感覚も含むものと考えました。）という言葉が分かりやすいのではないかと考え、この3つを基本目標に入れ込みました。

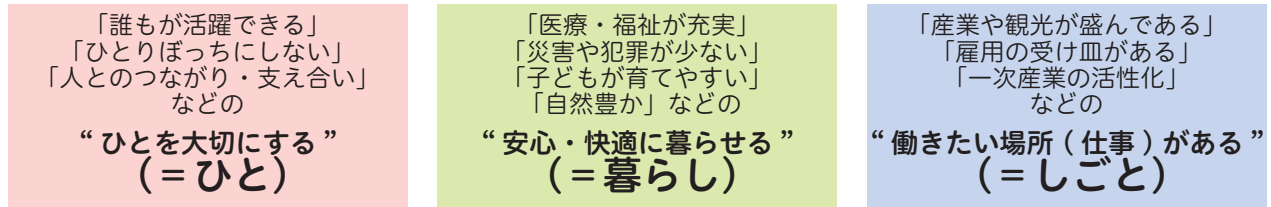
【目標に向かうために揺らいではならない前提】

この基本目標の達成に向けた様々な取組を進める上で、原子力災害による長期にわたる廃炉作業や環境回復の取組、避難指示の解除や解除後の生活・生業の再生、生活インフラの再生、産業の再生、さらには風評の問題や関心の低下による風化の問題などが着実に解決されていくことが大前提です。この前提がひとたび揺らぐと、本計画が描く将来の姿が根底から崩れる可能性があることから、引き続き、国、東京電力の責任ある対応を求めつつ、国・県・市町村が一体となって復興を進め、かけがえのないふるさとを取り戻す必要があります。

4 みんなで創り上げるふくしまの将来の姿

◆県民の皆さんから頂いた意見の分析

県民の皆さんから頂いたふくしまの将来の姿についての意見を県づくりの理念に沿って見ると、大きく次の3つに集約できます。



県民の皆さんから頂いた意見から導き出した「ひと」「暮らし」「しごと」の3つの側面は、相互に関連性があり、相乗効果がある場合もあれば、相反する関係にある場合もあります。

大事なものはバランス（調和）を取りながらこの3つを伸ばしていくことです。

これらを総じて、本県の将来の姿として、

“「ひと」「暮らし」「しごと」が調和しながらシンカ（深化、進化、新化）する豊かな社会”
 を、皆さんと目指してまいります。

◆「ひと」「暮らし」「しごと」ごとの将来の姿の全体像

「ひと」（＝ひとを大切にする）

- ▶ 誰もが生涯を通じて健康で、人とのつながりを大切にしながら、いきいきと暮らしている
- ▶ （復興）県民健康調査や、被災者の状況に応じた支援などにより、県民の健康の維持、増進及び不安解消が図られている
- ▶ 結婚・出産・子育ての希望をかなえる環境が整っている
- ▶ 子どもたちが多様な個性をいかしながら、健やかに育つ教育環境と安全・安心な居場所が確保されている
- ▶ 援助を必要としている人それぞれの状況に応じた相談・支援体制が充実し、一人一人が個人として尊重されている
- ▶ 本県の魅力や情報の発信により、福島とつながりを持つ人々が増加し、福島への新たな人の流れが増えている

「暮らし」（＝安心・快適に暮らせる）

- ▶ （復興）避難地域において、医療、教育、交通などの生活環境の整備が進んでいる
- ▶ （復興）放射線や放射能に関する正しい知識が普及し、風評払拭が進んでいる
- ▶ 災害に対するハード・ソフト両面からの備えが進み、災害に強い地域づくりが進んでいる
- ▶ 犯罪や人権侵害への対策が十分とられ、防犯・防火活動や交通安全活動が活発に行われる安全と安心が守られた地域社会となっている
- ▶ 安全・安心の医療提供体制が確保され、介護・福祉サービスが充実している
- ▶ 脱炭素社会や循環型社会の実現に向けた取組が進み、生物多様性や美しい自然環境が保全されている
- ▶ 人口減少にあっても地域資源を活用した取組により過疎・中山間地域も持続的に発展している
- ▶ 中心市街地の活性化、文化・芸術・スポーツ活動の振興や住民主役のまちづくりなど、暮らしの豊かさを実感できる地域づくりが進んでいる

「しごと」（＝働きたい場所（仕事）がある）

- ▶ 中小企業を中心に県内の地域産業が成長・発展している
- ▶ （復興）福島イノベーション・コースト構想の進展により、地域産業の活性化と新産業の集積・育成が進み、構想を担う人材の確保・育成も進んでいる
- ▶ 農林水産業が他産業並の所得を安定的に確保している
- ▶ 再生可能エネルギー等の利活用や、関連産業の育成・集積が進んでいる
- ▶ 県内の観光地に国内外から多くの観光客が訪れている
- ▶ 地域の産業を支える人材が確保・育成されている
- ▶ 利便性が高くバランスの取れた交流・物流網や情報網が整備されている

将来の姿

「ひと」「暮らし」「しごと」が調和しながら
シンカ（深化、進化、新化）する豊かな社会

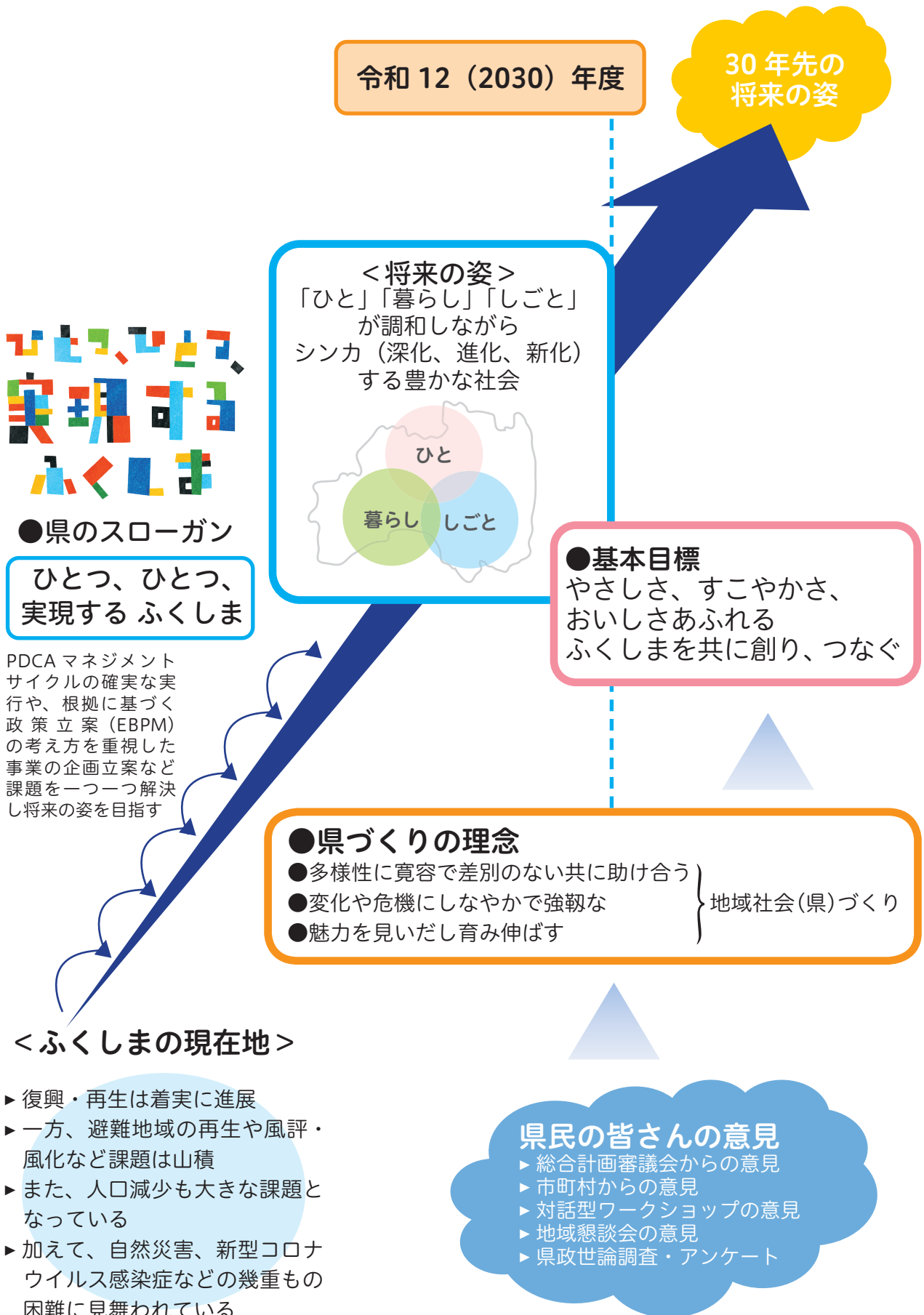


イメージイラストのコンセプト

県土から伸びる木の幹から分かれる枝葉（＝ひと、暮らし、しごと）がそれぞれ大きく育ち、重なり合う部分（＝調和）が色濃く育っています。

木は県土に深く根を張り（＝深化）、幹と枝葉を大きくし（＝進化）、日々新たな枝葉が芽生えています（＝新化）。

(参考)「県のスローガン」と総合計画(県づくりの理念、基本目標等)の関係性



5 SDGsの視点による将来の姿について

SDGs(※1)は、2030年に、「持続可能で多様性と包摂性(※2)のある社会の実現」を目指す国際社会共通の目標です。現在、多様な主体がSDGsに参画しており、その意義は以下のとおりと考えます。



SDGsの意義

企業・行政・NPO等の多様な主体との連携・協働する機会が得られることが期待

人口減少・高齢化など多くの課題を抱える自治体がこれを克服するための新たな切り口として活用

本県は、未曾有の複合災害に伴う広域的避難からの帰還環境整備や生活・生業の再生、福島イノベーション・コースト構想の推進、根強い風評との戦いなどの復興の取組と、急激な人口減少などの全国共通の課題への取組を同時に進める必要があります。これは持続可能な開発を目指すSDGsの方向性と一致しています。将来の姿の実現に向けては、その共通理解を図り、県内はもとより、本県に心を寄せる国内外のより多くの皆さんとの連携・協働をさらに進めることが不可欠です。

引き続き、国内外の福島に心を寄せる人々との連携・協働を深める

普遍的な課題に照らして県づくりの方向性を示す

国内外共通で理解が得られる表現、SDGsという世界の共通言語に照らして、本県の将来の姿を整理

他の地域よりも複雑な課題を抱える本県の目指すべき将来の姿の実現につながる

(イメージ図)

ふくしまの将来の姿
(「ひと」「暮らし」「しごと」とSDGsの対応関係)

(※1)SDGs:Sustainable Development Goalsの略称(エスディージーズ)

世界が抱える課題を解決し、誰一人取り残さない、多様性と包摂性のある持続可能な社会の実現のため、平成27(2015)年の国連サミットで決定した国際社会の共通目標。「貧困」「保健」「エネルギー」「気候変動」など17の目標と169のターゲットが示されており、国が定めた「持続可能な開発目標(SDGs)実施指針」(平成28(2016)年)において、地方自治体の各種計画にSDGsの要素を最大限反映することとされています。

(※2)「包摂性」:誰一人取り残さないという考え方のこと



■ SDGs視点の将来の姿



他の地域よりも複雑な課題を抱える福島県がどのような姿を目指すのか、福島に心を寄せる人々との連携・協働を深めながら、普遍的な課題に照らして県づくりの方向性を示すため、SDGsの17の目標ごとの視点で描きます。

10 人や国の不平等をなくそう

人や国の不平等をなくそう

- 年齢、性別、国籍、文化など様々な背景を持つ人々が互いに尊重し、自分らしく暮らしている

など

4 質の高い教育をみんなに

質の高い教育をみんなに

- 知識や技能のみならず、自ら考え課題解決できる子どもたちが育っている
- 震災の記憶の継承や復興への取組を基に、郷土への理解が進んでいる
- 生涯にわたって学び続けることができる環境が整っている

など

5 ジェンダー平等を実現しよう

ジェンダー平等を実現しよう

- 地域や企業等が一体となり、多様な子育てを支援する体制が構築されている
- あらゆる分野で女性の意思決定過程への参画が進み、女性活躍の場が広がっている

など

ひと

1 貧困をなくそう

貧困をなくそう

- 誰もが、医療、教育などの基礎的なサービスを楽しむことができる環境が整っている

など

11 住み続けられるまちづくりを

住み続けられるまちづくりを

- 各種都市機能の中心市街地への集積など歩いて暮らせるコンパクトなまちづくりが進んでいる
- 本県の魅力の発信や受入体制の整備により、本県への移住・定住の流れが確かなものとなっている
- 避難解除等区域における生活環境等の整備や居住人口の増加が進んでいる
- 過疎・中山間地域においても、医療や生活交通などの生活基盤が安定的に確保されている

など

3 すべての人に健康と福祉を

すべての人に健康と福祉を

- 若い世代から高齢者まで県民一人一人が心身ともに健康な生活を送っている
- 安心して妊娠・出産に臨むことができる環境が整備されている
- 安心して必要な医療を受けられる体制が充実し、医療の質も向上している
- 高齢者や障がい者など利用者の意向を十分に尊重した良質かつ適切な介護・福祉サービスが充実している
- 各種感染症に迅速かつ的確に対応できる体制が整っている

など

15 陸の豊かさも守ろう

陸の豊かさも守ろう

- 豊かな自然環境が保全されている
- 希少な動植物の保護など生物多様性が保全されている

など

16 平和と公正をすべての人に

平和と公正をすべての人に


- 安全・安心で、差別や虐待のない人権に配慮した社会づくりが進んでいる

など

暮らし

しごと

2 飢餓をゼロに




飢餓をゼロに

- 産地の生産力が向上し、生活に不可欠な食料を安定的に供給している

など

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに




エネルギーをみんなにそしてクリーンに

- 再生可能エネルギー関連産業の育成・集積が進み、一大産業集積地となっている
- 水素エネルギーの社会実証が進み、国内外の最先端モデルとなっている

など

14 海の豊かさを守ろう




海の豊かさを守ろう

- 水産資源を安定的に利用できる仕組みが確立され、活力ある水産業が営まれている

など

8 働きがいも経済成長も




働きがいも経済成長も

- 本県経済の中核を担う県内の中小企業などが主役となった力強い地域産業が成長・発展している
- 福島イノベーション・コースト構想の進展などにより地域外からの人材が還流・定着している
- 農林漁業者が他産業並の所得を安定的に確保している
- 県内観光地の魅力が高まり、インバウンドを含めた観光や教育旅行など地域を訪れる交流人口等が増加している
- 若者、女性、高齢者など誰もが安心して働ける雇用環境が整備されている

など

13 気候変動に具体的な対策を




気候変動に具体的な対策を

- 災害に強いライフラインやインフラの整備が進んでいる
- 防災に関する意識が高まり、自助・共助・公助による災害の備えが進んでいる
- 地球温暖化対策に県民一人一人が積極的に取り組んでいる

など

17 パートナーシップで目標を達成しよう




パートナーシップで目標を達成しよう

- 住民、企業、NPO法人や行政が連携し、住民主役のまちづくりが行われている
- 市町村とともに、効率的・効果的な行政サービスが行われている

など



9 産業と技術革新の基盤をつくろう




産業と技術革新の基盤をつくろう

- 県産品・観光の魅力や正確な情報の発信により産地評価の回復、競争力の強化が進んでいる
- 福島イノベーション・コースト構想が進展し、地域企業の活力向上と新産業の集積・育成が進んでいる
- 利便性が高い道路ネットワークが確保されるとともに、条件不利地域でも携帯電話等が利用できる
- 福島空港、相馬港や小名浜港は、物流拠点・交流拠点として地域経済の活性化に寄与している

など

12 つくる責任 つかう責任




つくる責任 つかう責任

- GAP等認証の活用などにより、持続可能な農業生産が進み、県産農産物の信頼性が確保されている
- ごみの減量化やリサイクルなど環境に配慮したライフスタイルが定着している

など

6 安全な水とトイレを世界中に



安全な水とトイレを世界中に

- 猪苗代湖を始めとする水環境が保全されている

など



(参考) 避難地域 12 市町村の目指す将来の姿

※福島 12 市町村の将来像に関する有識者検討会提言（令和 3（2021）年 3 月 8 日）から抜粋

●検討の視点及び基本的方向

- 1 人口減少・少子高齢化社会の下で持続可能な地域・生活の実現
- 2 広域的な視点に立った協力・連携
- 3 世界に発信する新しい福島型の地域再生

●目指すべき 30～40 年後の地域の姿

- 1 将来の世代につなぐための 30～40 年後の地域の姿
 - ▶ 12 市町村は全域における避難指示の解除が実現したうえで、災害復旧の観点をはるかに超え、より発展した復興の姿を目指す創造的復興を成し遂げている。
 - ▶ 将来世代を始めとする人々が幸せに暮らし、誇りや愛着が持てる魅力ある地域となり、併せて、原子力災害による被災地域というマイナスのイメージからの脱却はもとより、地方創生やロボット、再生可能エネルギーの導入拡大を含むエネルギー等の新産業分野、教育・ひとづくり、社会課題の解決等において、国内外を牽引する「希望の地」として、国内外の叢智を結集しつつ、取組が進められている。
 - ▶ 避難指示の解除時期の違いに関わらず、いずれの市町村においても、防犯・防災はもとより、医療・介護・福祉、教育、買い物等における利便性が高く充実した生活環境が整備され、誰もが安心して暮らせるまちになっている。
 - ▶ 農林水産業を含めた産業・生業が再生・発展し、地域全体での経済循環も成り立っており、加えて、国際教育研究拠点における取組等を通して福島イノベーション・コースト構想等の各構想が実現し、新たな時代をリードする産業基盤が構築され、新産業の創出が着実に進展・発展している。
 - ▶ 12 市町村の魅力は大きく高まり、「誰もが住みたくなる、憧れるまち」となっており、帰還した住民や新たな移住・定住者、インバウンドを含めた観光や教育旅行など地域を訪れる交流人口等が増加している。
 - ▶ 避難先で生活を再建した方々とのつながりや絆が維持され、子どもや孫の世代を含め創造的復興を成し遂げた魅力あるふるさとへの関心が高まりをみせている。
 - ▶ 東京電力福島第一原子力発電所の廃止措置が完了し、誰もが心配する必要のない十分に安全な状態で生活が出来る環境が確保されている。東京電力福島第二原子力発電所も廃止措置が進展している。
 - ▶ 福島県内で生じた除去土壌等については、2045 年（令和 27 年）3 月までには、県外で最終処分が完了している。
 - ▶ 風評が払拭されるとともに、いわれのない偏見・差別が解消され、福島県の農林水産物や観光地は確固たるブランドを確立している。
 - ▶ 住民の帰還や新たな移住・定住者の増加に伴い、12 市町村の居住人口は増加し、地域の活力を取り戻すレベルに達している。

など

●国内で選ばれる地域とするために努力すべき領域

- 1 充実した生活環境や産業・生業の再生
- 2 福島イノベーション・コースト構想の推進等による新産業の創出と集積
- 3 復興を継続的に支える福島 12 市町村ならではの特色を持つひとづくり
- 4 他地域の課題解決に寄与する復興に関する知見の体系化と活用